

第2回 法科大学院全国統一適性試験 講評

平成23年6月20日

TAC 司法試験講座

第1部（論理）

1. 全体的な傾向

2011年「適性」第2回の第1部「論理」は、問題数と基本的な視点に変化はなく、おおかた第1回にそった問題構成であった。

比重にはやや変化があり、条件をあてはめて解く問題が減って、推論・論証自体や論理構造への関心がさらに強まり、パズルよりもリーズニングに重きをおくという日弁連の基本姿勢が再確認された。

難易度の高い問題もあったが、第1回よりも全体的な量感とわずらわしさが減り、解きやすかった人も多かったであろう。

注意を要する問題は3～4問。

日本語表現で惑わす問題は2問あった。問題16（集団主義）は、正解肢の意味が揺れる。問題15（ねずみの肥満への影響）には、理系の受験生が意味を取り違えやすい肢が入っていた。どちらも消去法を用いて解く問題である。

理数系の思考を特に要する問題は、第1回と同様、1問のみ（問題18、土地の売買価格と面積のグラフ）で、一見して得手不得手の判断がつくため、ポイントとなる問題ではない。

問題20（野菜・魚・ご飯）のクラス推理は、対偶とヴェン図を組み合わせで確認する問題で、基礎学習が必要。この問題にはきちんと対応できる力をつけておきたい。

2. 問題概要

設問の種類は、前回と同様、①推論の妥当性、②パターンの異同、③話題と共通認識、の3種類に大別できる。

①「推論の妥当性」について問うものは、さらに次のa～cの3種類に分けられる。

a. 「推論の批判・主張の補強・完成」——問題2, 4, 6, 9, 16, 24, +20, 23（計8問）

推論の不備を批判したり、補強・完成したりする能力を試す、最も重要な問題群。

問題23（ダンゴムシは昆虫ではない）では、論証の飛躍を埋める問題が復活したが、過去の「神の存在証明」などの出題に比べ、今回は基本的である。

上述した問題20も、推論形式についての正しい理解を問う問題であり、単なるデータ処理とは異なるため、ここに分類できる。

b. [データからいえること] ——問題 3, 13, 15, 18, 22 (計 5 問)

特に「論理」についての学習は要さず、与えられた条件を整理して、解く問題であるが、上述した問題 15 のように、表現に注意を要する問題もある。第 1 回より 3 問減。

c. [原因や根拠の推定] ——問題 7, 19 (計 2 問)

本文中には言及がないことがらを挙げて、因果関係が成り立つかどうかを判断させる問題で、第 1 回試験と同じ問題数であった。

②「論理構造の異同」を問う問題は、問題 5, 10, 12, 14, 17, 21 (計 6 問)

第 1 回より、1 問増。今回は循環論法（問題 10）や、対当推理（問題 21）も出題され、基礎学力が試された。

③「共通認識・争点」を問う問題は、問題 1, 11, +8 (計 3 問)

共通の話題と見解の相違を見分ける問題。

問題 8（蜂のコロニーと株式マーケット）は、対話形式ではないが、共通認識を問うものとしてここに分類した。

第2部（分析）

・総評

本年第1回と比べると、わずかに難しい問題が並んだ印象がある。とは言え、昔の難易度に戻ったというほどではない。なお、大問ごとの難易度は、あまり不明瞭ではないが、大問1, 2, 3, 4と進むにつれて難しくなる印象。このような、進むにつれて難化する大問ごとの難易度の差は、2009年まで明瞭に存在したが、2010年、そして本2011年の第1回では不明瞭になっていた。そのため第1回の講評では「もはや日弁連は問題を難易度順に並べる事に意義を見出していないのかもしれない」と述べたが、この言葉は訂正せねばならないようだ。今後は「さほど明確ではないが、大問は進むほど難しい。ただし難易度の差をつけ損ねる事はあるので、問題1が難しくても、諦めずに先を見ろ」これが結論だろう。また、各大問内で小問ごとに見ても、最後にやや難しい問題を配置していた印象。内容を見ると、問題1と3は共にスケジュールの問題と呼ばれるタイプ。ただし要求される情報処理内容は異なる。問題1のタイプのスケジュールは本年第1回を含め、適性試験では頻繁に出題している。問題2は変則嘘つきゲーム。嘘つきゲームは本年第1回試験の後にTACで開催した試験講評会にて、出題可能性の高い問題として指摘させて頂いた。予測的中、とさせて頂きたい。また問題4は変わり種の場合の数を操作させる問題。よく工夫されていて面白い出題だった。場合の数とスケジュールも2009年以来続いた出題パターンとして、前述の講評会にて指摘させて頂いたが、対策は出来ただろうか。総じて今回の問題は、日弁連第2部では例年見慣れたパターンの、難易度は適度に難しく、バランスの良い出題だったのではないだろうか。

・出題形式

図が与えられる問題は無く、大問4題に小問が6問ずつで計24問。例年通りである。難易度は進むにつれて、ある程度難しくなっている印象だが、「絶対に頭から解かねばならない」というほどの差ではなかった。

出題内容は問題1と問題3が一般的にはスケジュールの問題と呼ばれるタイプ。ただし問題1は、むしろ表を埋めていく次元の位置の問題と言った方が良いでしょう。問題2は変わり種の嘘つきゲームに順序順位を合わせたような出題。学生たちのセリフにBとCの名が頻出しており、出走順序はまず置いて、BとCがいずれか一人、選ばれていないとしたら...と考えると、早々にBCが選手に選ばれたことがわかる。

問題4は場合の数の処理を要し、時間軸も若干からんだ条件の複雑な問題。よくひねりの効いた、手応えのある問題だった。

・問題難易度

いずれの大問も、最後まで不確定要素が残る設定が多く、去年や今年の第一回とそう大き

くは変わらないものの、若干の難化と見る。平均点は 50 点前後～50 点台前半で 48～55 点、可能性が高いのは 50～53 点程度か。いくら受験生が減ったといっても、2008 年や 2007 年のような 40 点台前半ということはないと思いたい。

第3部（読解）

1. 全体的な傾向

例年通りの形式で、第1回の問題1のような特殊な文章はなく、テーマも、数年前に出題されていてもよかったものばかりであるが、全体として議論の水準が高く、読み取りのスキルを要する試験であった。どこから手をつけてよいか迷った受験生も多かったであろう。

設問形式としては、タイトル、小見出し、並べ替え、「特徴」「定義」などの組合せ問題が復活し、時間のかかる問題も多かったが、昨年までしばらく続いた「いくつあるか」という設問がなくなり、狙いがわからない問題はない。

大問の構成は、問題1、2は、やりようがある問題で、問題3、4は、だれでもそれなりに時間がかかる問題となっていた。

最も易しかったのは、問題2（『生物と無生物の間』）で、1ページ目がちんぷんかんぷんでも、読み方を変えれば、さほど時間をかけずに全問とれる。文章の入り口で挫折してしまった人は、もったいないことをした。

全体の山場となったのは、問題3で、作り方も最も日弁連らしい。自信がある人でないと、手をつけづらい問題でもある。

問題1、2で、「出るポイント」がうまく拾えた人は、今回の試験で「成功」しているはずである。

要注意問題は、3問。問題1－(3)（語補充）は、苦手意識のある人は時間をかけてはいけない。問題3－(2)（典型的なコモنزの特徴）は、難易度が高い。本番ではこの2問を深追いせず、他の問題で確実に点を取っていくことが大切である。問題4－(2)（小見出し）は、「ひっかけ」が入っており、うっかりしやすい。これら3問は、落としてもあまり気にしなくてよい。

2. 問題概要

問題1

「古典功利主義の再構築」について論じる文章。「功利主義」が、やっと出た。未修者小論文の学習をしたことのある人は、「功利主義にとって、『人格』は手段にすぎない」という話題は、カントの哲学との対比から頭に入っているはずである。本問全体では、「統治単位」に早く焦点を合わせられれば、成功。「縮小」や「近代的な個人はもはや無用」という内容に注目できなかつたら、学習不足である。

問題2

大ベスト・セラーとなった書物なので、わざと時期をずらして出題したのであろう。今回の試験では、唯一「一般人向け」の文章である。文系も、終わってから読んでいけば、易しい。

問題 3

「公共性」「コモンズ」は、功利主義と同じく、ロースクール受験生の必修テーマである。「重層的」「動的」などのポイントを拾うのは易しいが、「ルール」と「レジティマシー」がぴんとこないとハイスコアはとれない。

問題 4

「ら抜き」「さ入れ」「れ足す」言葉について。だれでも意味はわかるが、整理に神経を使うため、日弁連試験のタイムプレッシャーのなかでは、やりづらい問題であろう。